
井戸端だより

第70号

発行日：2010.6.22

発行：くらしの学習会

菅内閣の発足で、民主党の支持率が回復した感がありますが、一体今後日本の姿はどうあるべきなのでしょう。第三の道は本当にバラ色の道なのでしょう。食の面では、宮崎県の家畜口蹄疫はまだ拡大の一途で、いつ終息するのか先の見えない状況です。また、前鳩山政権が躓いた普天間問題は、日米安保が本当に必要なのか、必要だとするならどういう形で必要なのかを論ずるいい機会であるにもかかわらず、単なる移転先をどこにするかの問題になってしまっています。

世界で第3位の平和な国(1位ニュージーランド、2位アイスランド)だと思われているという日本の、今後進むべき道は？井戸端会議で大いに話し合いたいものです。国民一人一人が真剣に考えることが、国の進むべき方向を決める原動力になるのではないのでしょうか。第70号の井戸端だよりをお送りします。読んで何か感じていただければ幸いです。

目次

・4月例会報告P.2~3
・5月例会報告P.3
・6月例会報告P.4~5
・愛媛新聞切り抜きP.6
・弟の涙P.7
・石鎚山P.8
・34年ぶりに九州へP.9~14
・入野松原とウミガメP.15~16
・雑感P.17~20
・ごみ出前講座よりP.21
・お知らせ・編集後記P.22

4月例会報告

4月20日(火)『くらしの学習会』リーダーをずっと務めてくださっているHさんの快気祝い(3月に膝の手術をされました)を松山市石手にある料理旅館 梅檀で行いました。食事の後、今年度の活動計画などについて話し合いをし4月の例会とさせていただきます。6名の参加でした。

一度は行きたい老舗の名店 梅檀 では宿泊か夜のお食事だけと諦めていたのですが、メンバーのご主人からの情報でお昼の食事も行っている事を知り早速予約をし実現しました。石手川の瀬音が聞こえ涼風が渡ってくる一角にあります。門をくぐり打ち水がなされた石段を上る、立派な玄関ではお香の香りに迎えられ凜とした空気にちょっぴり緊張。庭に面したお座敷に通され、広々とした空間・お部屋のしつらいの素晴らしさ・お料理と共に楽しみました。頂いた資料によると、「家庭ではできないおもてなし」を、季節を大切に作る「季」料理の着物ともいうべき「器」心落ち着く木造建築と庭の「木」気配りの「気」お客様の生を守り、瀬戸内の生きのいい魚介類を供する「生」の五つの「き」で表現しているそうです。この日の献立は

食前酒 白酒(白酒と日本酒をブレンドし甘めですがアルコール度数高め
当然ながら運転手さんは匂いだけで残念でした)

先付 帆立て貝柱 のびるのぬた添え

吸物 すり身・結び人参・うぐいす菜・へぎゆず

お造り 鯛・まぐろ・大根つま・水前寺海苔・葉わさび

炊き合せ 鯛の真子・筍・うど・うるい・木の芽

焼物 鮭の甘味噌焼き・酢蓮・大根人参巻なます・空豆の甘煮

強肴 筍まんじゅうあなご包み

油物 椎茸の海老しんじょ詰・より海老・たらの芽

食事 山菜御飯・香の物(かぶ・きゅうり・はくさい)味噌汁

デザート はるみ・いちご

と、昼会席膳とはいえ本格的な会席料理が供され、薄味なのにしっかり出しの利いた丁寧な仕事の料理に皆大満足でした。食前酒がすっかり緊張を解きほぐしてくれ、初めて口にする素材の名前を仲居さんに聞くとすぐ返って来るし、こうした食材が使えるのもさすが老舗の名店ならなのでしょう。とて

も贅沢な時間を過ごせ、いい経験ができ有意義な一時でした。

食事の後、今後の活動について話し合いをもち、6月になれば高速が南予方面は無料・他も四国内なら上限2000円になる予定なので、遠出はそれ以降にし、5月は、それぞれが気になっている事、興味のある事などの話し合いをする事とし、梅檀を後にしました。が、高速道路の新体制が6月から始まるのか分からない状況になってしまったので（この会報が出来る頃には決定しているかもしれませんが）6月の例会時に再度話し合いを持つことになるでしょう。 (A・M)

5月例会報告

4月例会時に、それぞれが今考えていること、興味のある事を持ち寄って話したい、ひいては人生を語りたい、と言っていた会員の要望に応じて、5月8日林宅でテーマを決めないでするおしゃべり会をもちました。土曜日ということで最近あまり参加できていない会員の参加もあり、7名が集まりました。人生を語れたかどうかはわかりませんが、絶えることなく雑談がつづいたということは、このような機会に全員が飢えていたということでしょうか。特にテーマを定めないのでの語り合いも意味のある事だと感じました。

ひょっとしたら赤ちゃんを連れて参加できるかもしれないと連絡をくれていた会員が来られなかったのは残念でしたが、またの機会にお子さんの成長ぶりも拝見したいものです。

ここ数年、ある会員が、毎月の例会風景の写真をパワーポイントで上手にレイアウトして、1枚のポスターにしてくれています。5月例会は、一人の会員が持ってきてくれた京都の砂糖細工菓子(有平糖)が主役でした。精巧な花びらの花と葉は、黒の背景に映えて素敵でした。日本の和菓子の繊細さを目と舌でしみじみと味わいました。

6月例会は、愛媛大学城北キャンパスめぐりと決まりました。新しくできたショップを見て、新しくできたレストランで昼食をとり、その後愛大ミュージアムを見学することになりました。 (T・H)

6 月 例 会 報 告 （ 愛 媛 大 学 の 見 学 ）

1. 日時 6月9日 水曜日 午後12時30分に愛媛大学正門前に集合
2. 参加者 7名

当日は、日差しが強くなり、それまでの過ごしやすい気候とは、幾分、違っていました。心地よい風が、時折、吹くことで、横河原線、市内電車の公共交通機関を使つての愛大までの時間は、楽しいものになりました。普段、自家用車ばかりの私は、カードで電車料金を支払うシステムに戸惑いました。約一か月振りの例会に、会員の顔を見ると、安心感で満たされます。電車の中での切れ間のない会話は、この例会までの、会員、それぞれの暮らしぶりの報告会になりました。

正門前で、午前の講義を終えた会員と待ち合わせをして、まず、食事。正門から入ると、どこも、きれいに整備された建物が目に入りました。学内に最近開店した校友会館(?)のテラス(?)に入りました。4種類のランチから好みを選ぶスタイルで、接客のサービスがありますが、値段は、学生食堂の域をこえないものでした。まず、スープから。味の好みは色々な話ができましたが、食事を終えたお腹の具合はまあまあ。ほうれん草のソテーがソースになっていた私のロールキャベツは、とても大きかったのですが、ぺろり。同じ場所で、ピースボートでの経験を市民に展示公開している部屋がありましたので、ちょっと、寄り道。世界中をめぐった彼女の説明を聞く時間とは外れていたもので、残念でしたが、展示写真から、彼女の経験は、理解できました。最近、若い人は、どんどん世界に出ていきます。ジャイカへの貢献も見聞します。今後の人としての彼女の生き方に、いい影響があると、彼女の表情がそう言っていました。

次に、愛大「えみか」へ。愛媛大学と地域の連携で作られた製品の販売で、話題になっている場所です。東温市の蔵元と協同したお酒や、裸麦ロール、藻塩、真珠、柑橘等。愛媛県の各地域や個人と連携して愛媛大学から、愛媛を発信したい姿勢が理解できました。さて、売り上げはどうなのでしょう。

そして、今回例会の目玉。愛媛大学ミュージアム見学です。

このミュージアムは、2009年11月14日に一般公開を開始したそうです。館内は、4つの大きなテーマで展開。「進化する宇宙と地球」「愛媛大学と愛媛の歴史」「生命の多様性」「人間の営み」の各ゾーンでは、子どもから大人まで、楽しみながら知的好奇心を刺激する仕掛けがあったり、くつろぎのスペースを設けたりと、リピーターを促す工夫が随所にありました。時間の関係で、ガーデンがいいねえといいながら、ゆっくりできなかったのは残念でした。ですが、入場料金がかかりませんから、気軽に再訪も。

それでは、私が見た愛大ミュージアムの中でも、特に、印象に残った展示をご紹介します。

「古生物」コーナーのアンモナイトの大きさは、直径約65センチ、重さ約90キロです。サハリンのナイバ地域で採取されたものです。今から約7500万年前の白亜紀後期の地層から発見されました。この巨大アンモナイトはオープン展示されていますから、実際に触れてもいいのだそうです。見ないとわからないと思いますが、本当に大きいんです。又、アンモナイトのこれほどの種類の展示は、全国でも稀だそうです。

「地球深部」コーナーでは、地球深部ダイナミクス研究センターの研究成果である、現在、地球で、最も硬い物質「ヒメダイヤモンド」が展示されています。黄色がかった透明のダイヤモンドです。顕微鏡で、その輝きを見ることができます。このヒメダイヤモンドが人類にどう使われているのか、興味が湧きませんか。

「昆虫」は第3ゾーンです。大学には、半世紀以上かけて収集した120万点の昆虫標本がありますが、なかでも、甲虫(かぶとむし)に関しては、世界でもトップクラスの種類と数を誇っています。一度には、展示ができないので、随時入れ替えて展示されるそうです。夏休みの子どもたちの見学場所として、とっておきではないでしょうか。又小、中学校の遠足にもいいと思います。

企画展示スペースに、「アロサウルス」、肉食恐竜だそうです、化石標本が展示されていました。

アロサウルスは約1億5千万年前のジュラ紀後期に生息していた大型肉食恐竜で、化石は全長7.1m。化石とか剥製とかを見る機会が時々ありますが、これは、本当に全長すべてがきれいに保存されていて素晴らしい化石です。国立科学博物館のご協力だそうです。アロサウルスの事が良く理解できるように、展示の仕方が工夫されたものでした。映画「ジュラシックパーク」が、全て、映像の中だけのものではなく、実際に近いものとも言えるんだなあと思いました。フィルムもあり、楽しい空間になっていました。

「生命科学工学」コーナーは、時々、マスコミで取り上げられている「無細胞タンパク質合成技術」に
関係する展示。研究内容は、私にはまったく理解できませんが、世界初の全自動タンパク質合成ロボットの初期号、4万倍に拡大した人間の細胞模型などの展示がありました。この技術は、ノーベル賞ものだと
言われているそうです。日本の中の四国の中の愛媛から、ノーベル賞を受賞する期待のかかる学者の存在は、うれしい限りです。愛媛の人の期待は、実に大きいそうです。

ミュージアムの見学も終わり、次回例会の相談を大学構内にある大きな木の下ベンチでしました。
気温は暑いのですが、巨木の下ベンチに座り、そよかぜを感じながら、心地よい10数分間でした。

しばし、学生になった気分を味わいながら、そして、愛媛の知的財産も少しばかり理解した気分になり、
6月例会を終了しました。皆さん、お疲れさまでした。

(M T)



東温市汚職

市、伊藤被告を懲戒免職

百条委設置求める市議会も

東温市の産業廃棄物積み替え保管場所への苦情処理をめぐる贈収賄事件で、同市は16日、収賄罪で起訴された市民福祉部市民環境課主任伊藤正直被告(50)を公判中Ⅱを懲戒免職処分にした。同日の市議会議員全員協議会で報告した。協議会では、

一部の市議から百条委員会の設置を求める意見が出た。市は上司の市民環境課長(57)も監督責任を問いついで戒告処分とし、2009年度まで上司だった市民福祉部長は3月末で退職したため不処分とした。

全員協議会で高須賀功市長は「公務員倫理が厳しく求められている中、極めて遺憾。今後このような不祥事が二度とないよう信頼回復のため全力で職務に精励する」とあらためて陳謝。大西裕総務部長が「14日の初公判で本人が起訴内容について認めたため」と処分理由を説明した。

渡部伸二市議(無所属)が「議会として責任を持って(事件を)調査したい」と述べ、6月定例議会最終日の22日に百条委設置の動議を提出するとした。会后、大西総務部長は高須賀市長ら幹部の処分については「今後検討する」と話した。



東温市産廃汚職事件で、職員処分などを理事者側が報告した市議会議員全員協議会＝16日、東温市役所

市議側は高須賀市長が09年11月に問題の保管場所を視察していた点について「なぜ今まで報告しなかったのか」と質問。高須賀市長は視察の事実を認め、理事者側は「公判の支障になると判断したため」と釈明し、現地での詳しいやり取りの内容も「公判中で説明できない」と

東温市汚職 5年前接待疑惑 市長に報告せず 副市長が議会答弁 東温市産廃汚職事件で、収賄罪に問われている市市民環境課主任伊藤正直被告(50)が5年前にも業者と癒着していた疑惑が15日の市議会本会議で取り上げられ、被告の上司の保健福祉部長だった加藤章副市長は当時、疑惑

を市長らに報告していなかったことを明らかにした。片山益男氏(無所属)の一般質問に答えた。市などによると、2005年4月ごろ、伊藤被告が市内の産廃処理業者から酒食の接待を受けているとの情報を入手した関係者が、所属課に進言。課長が本人に確認したところ「そんな事実はない」と否定したため、加藤副市長は総務部長や市長らに報告しなかった。

高須賀功市長は片山氏に感想を問われ「報告がなかったことは非常に残念だ」と答弁した。加藤副市長は取材に対し「当時もっと注意していればよかったかもしれないが、それ以上の疑惑がなかったため重大な問題ととらえられなかった。今回の事件を基に今後の対策に努めたい」と述べた。

弟の涙

カーテンの隙間からかすかに入ってくる光に目覚めるのが、4時半～5時。一日の始まり今日も元気に過ごそうと、玄関に出て新聞を取り込む。布団の中で、先ず一面と地軸を読み、次は最後から読み進んでいく。読者の広場やてかがみ(婦人投稿欄)は興味深く読み、感動したり同じ考えだと嬉しくなる。

この朝のひと時が私にとっては幸せな時間であり元気をもらう時間でもある。年を重ねると誰にも迷惑を掛けず、布団の中で知らぬ間にこの世を終えたらと願うが、神様がそれは許して下さらないだろう。

私の父親は結婚が遅く、子供も多かったので働いている姿しか残ってない。いつの間にか肺癌に冒され60歳で亡くなったが、自分の命も終わりと悟り、東京に住む妹に、大学に通っていた娘の四女を頼むと、弱々しい字で葉書に託し、それが届いた日に父は命を落とした事は、母からの話でよく覚えている。神の成せる業だったのだろう。その時の妹が今や67歳でピアノ塾で自立した生活が出来たので、父親にも東京の伯母にも感謝している。

その時中学三年だった弟が、姉妹の間に一人だけの男子で、父なき後母を困らせた生活しか出来ず、皆に迷惑を掛けたが、ある日突然、里から電話がかかり肺癌と診断され進行が早くあと半年か1年の命だという。

え、と頭が真白になったが、近くに住む妹と二人で県病院へと急いだ。少し痩せた暗い顔の弟がベットの人となり、私達の顔を見るなり男泣きに涙が止まらない。もらい泣きをしたが、涙する弟の人間性に触れた気がした。

死へ向かう恐怖なのか、家族に迷惑を掛けた反省なのか、見舞ってくれた嬉しさなのか、分からないが、人間誰もが感情を持ち涙する事は多いが、明るい顔にあふれる涙でありたい。

話を聞いていると、少し疲れ足が立ちにくくなったので嫁と一緒に、県病院で検査してもらおうと、もう脳にも腎臓にも転移していて手術は受けられず、抗癌剤治療しかないと言われたそうだ。

父親が肺癌で亡くなっているのだからDNAからして検査を早めに受けるべきだったと家族も姉妹も言うが、本人が、「私が病院へ行く時は死を思ってくれ」と言う程、健康で医者嫌いだったという。今となつては、少しでも命を延ばすこと、苦しまずに皆に別れを告げることだと話し合った。

1回目の治療が、6月1日に終わり一応家に帰るそうだ。99歳で一昨年亡くなった母親の法要があるので、仏前で母親に報告し、「私の所へ早くおいで」というか、「もっと命を大切にしてください」というか本人だけに聞こえる声だろうと思う。

(Sa. K)

石鎚山（標高 1982m）

5月31日に西日本の最高峰で修験の山・花いっぱいの山として知られる石鎚山に登った。午前5時起床、6時山之内公民館でS夫妻と待ち合わせ、砥部公民館で河原リーダーと合流して、土小屋コースを登る。歩行時間は登り2時間30分、下り2時間で歩行距離は、93km（約23里）で横河原から酒だる村を4往復したことになる。

20代に一度登った時は道も悪く、鎖を登ったが、今度はよく整備されている安全な道でいろいろな花を楽しみながら登った。石鎚山の春は雪解けの終わった山麓から徐々に山頂に向かって訪れるというが、山の高さに応じた多種多様な植物に、Sさんは写真を撮りまくっている。山しゃくやくの群生が岩場に見えたが、危なくなかなかカメラに収められない。以前は近くでゆっくり鑑賞できたが、心ない人々の手にかかり、近場は絶えたという。少し登るとアケボノツツジがみごとに開花していた。山頂に近づくとイシヅチザクラの白花が私達を迎えてくれた。弥山頂上に着いたのは11:30、平日なのに大勢のグループが登っていた。

昼食をとる。これから最後の山頂天狗岳までは、危険な岩場を注意しながら登ること約10分で到達できるというが、手の届く所に見える天狗岳以外は霧に包まれ何も見えない。雨もようになってきたので、あきらめて下山することにした。

朝は晴れていたもので、カッパを風よけジャケットに入れかえたのは失敗だった。山の天気は変わりやすいということを肝に銘じた。リーダーが傘を持ってきてるからと、カッパをぬいで貸してくださった。

以前主人と阿歌古溪谷を歩いて東三方ヶ森に登った時、足をすべらせて水にぬれ泣きべそをかいていたら、「自分で立ち上がって歩けないんならここから帰れ」としかられた。私は黙ってもくもくと歩いたのを思い出した。山へ登るということは、間違ったら命にかかわるということ。これからは人に迷惑をかけないように装備し、行動できるよう心がけよう。

中腹まで下山したら山岳救助隊の人達が訓練で登ってこられるのに出逢った。ご苦労さまです。気をつけてと声をかけ合った。幸い途中で雨が上がり無事土小屋にたどりついた。このところ低い山で比較的楽なコースを登っていたので、今度は高い山に登ったという特別な味わいがあった。

石鎚の

七色八色

山もよう

(S・M)



34年振りに九州へ

5月18・19日湯布院一泊で夫と二人ドライブ旅行に行ってきました。昨年5月にも今回と同じコース・ホテルで行ったのですが、天気にもかかわらず由布岳が雲に隠れてその姿を見せてくれなかったのと、ホテルの露天風呂の気持ち良さを再度体感したくて、少し早めの誕生日プレゼントとして出かけました。長い文になってしまいましたがお付き合い下さい。

九州といえば34年前、新婚旅行が車での九州旅行（フェリー2泊宿5泊熊本・鹿児島・指宿・えびの高原・宮崎）だったのですが、色々調べ見て回った旅行ではなかったので、今度は行きたい所をしばらく欲張らない小旅行を楽しむ事に。昨年は、オレンジフェリー八幡浜am2:50発 白杵5:15着で日の出とともに移動開始。目的①延岡から五ヶ瀬川（護岸工事を進めていない美しいせせらぎと景色を楽しめました）を眺めながら高千穂峡へ。途中「道の駅」をいくつか立ち寄ったのですが朝早かったせいか楽しめず、「道の駅 高千穂」でやっと朝食。スピリチュアルスポットを探訪（高千穂神社 天岩戸神社・高千穂峡）町の至る所で神の気配を感じられ、ゆったりとした気持ちになれた気がしました。高千穂を後に阿蘇方面へ。進むにつれ阿蘇独特の景色が目に入ってくると一気に美しい山並みにつつまれ、33年振りの光景に少々の怖さを感じるほどの雄大さに圧倒されました。目的②やまなみハイウェイにある「九州芸術の杜」へ。旅行目前、俳優榎木孝明氏の絵画展に行った際、九重飯田高原に美術館があることを知りパンフレットを頂いたので訪れる事に。榎木孝明美術館、大野勝彦美術館、中村通雄美術館、前田真三・前田晃風景写真館、ギャラリーショップが自然に囲まれた敷地内に点在し個性あふれた作品に触れ至福の一時を過ごせました。「九州芸術社」を出ると景色は一転、乳白色の世界に。この後「九重夢大吊橋」に立ち寄る予定でしたが、無理そうなので（天候の悪い状態時は通行できないそうです）事故に気をつけながら宿へ直行。湯布院の町が近付くにつれ天気は回復、太陽さえ出ています。ホテルにチェックインし、夕食前にまず温泉へ。夜は一階の大浴場が男性二階が女性、朝は女性が一階男性が二階となっているので両方楽しめます。先に入浴を済ませた夫によると、由布岳の勇姿が正面に見える開放的な露天風呂で気持ち良いとの事、ちなみに二階のお風呂は一人用の

丸い陶器製の浴槽が三つありそれぞれ香りが楽しめるものと、普通の浴槽があり半露天風呂でした。さっぱりとし会席料理を個室食事処で堪能、大満足で部屋に帰りもう一度お風呂へ。のんびり半露天に入り部屋に帰ると夫はすでに夢の中。昨晩は寝ていない様なもの、昼間はずっと運転でお疲れ様でした。私も9時過ぎには床に就き翌朝5時までぐっすり。早速一階の露天風呂へ、霧に包まれた由布岳の姿が墨絵のようにうっすらと見え、野鳥の鳴き声を聞きながらの初露天に大満足。朝食までに帰り支度をし朝食へ。和洋折衷バイキングをたっぷり頂き、湯布院散策へ。昨日、車から見た様子は多くの観光客で賑わっていたのに、とても静かで開店準備をしていたり普段の生活が戻っています。小さなエリアではありますがのんびり散策をしていると2時間程度歩いていました。その頃には土産物店が開店し人が増え始めたので、駐車場へ帰り今回の目的地、憧れの由布院御三家の『山荘 無量塔』のパブリックスペースへ。お宿のオリジナル商品（調味料・食品・アメニティグッズ等）を揃えたショップで自分への御土産を購入。さすが御三家、黒のスーツを着たショップの方の対応もキチンとしていて違いを感じ取れました。

その後、昨日行けなかった『九重夢大吊橋』へ。歩行者専用吊橋としては長さ390m、高さ173mでともに日本一、遠くに九重連山・目の前と足元には深く入り組んだ九酔溪の鳴子川溪谷が迫り迫力満点。幾筋もの滝があり、標高777mからの眺めは絶景でした。揺れる事も無く無事渡ることができましたが、警備の為かガードマン数人が常に橋を巡回していました。近くのレストランで自然食系昼食を取り高速で臼杵市へ。途中、湯布岳PAに車を止め湯布岳を真近に眺めると天気は良いのに頭に雲が掛かり、全体を見せてくれなかったのがとても残念でした。臼杵市へ早く着いたので『国宝 臼杵石仏』へ、平安後期から鎌倉時代にかけて掘られ、規模・数量・質の高さは比類のない国宝石仏群。60余体の磨崖仏は千年の風雨に堪え、ひたむきな信仰のあかしを今なお残している。長年の歳月をかけて行われた保存修理工事を平成6年に終え、その時に頭部の姿で親しまれ古園石仏中の大日如来像も本来の姿（胴と一体になり）にかえり、臼杵磨崖仏四群59体が、平成7年国宝に指定された。独身時代社員旅行でここを訪れた際、大日如来像の頭だけが置かれた姿で、風雨をしのぐだけの浅い軒があり金網で囲われていた記憶があった

のですが、立派な建物の中に安置、周囲も公園に整備され昔の光景が懐かしく思い出されました。夫は初めての場所だったので立ち寄れて良かったです。17時30分のフェリーで九州を後にし、お天気続きで良い旅でした。

今回は、宮崎での口蹄疫拡大の報道される間に予約していたので、心苦しさを感しながら出発しました。少し風が強く15分程度臼杵到着が遅れましたが、遅れた時間分昨年より明るく、臼杵の早朝の町中を走り抜け阿蘇方面に向かって国道（502号～10号～57号）をひた走りました。途中3ヶ所の「道の駅」に立ち寄りしましたが、朝が早すぎてトイレと自動販売機のみ利用で、休憩をかねて持参した簡単な朝食を取り洗面をし出発（真新しい道の駅でしたがトイレの清掃管理が悪く汚れ悪臭にガッカリ）阿蘇山をぐるり一回りのコース（約60km）を巡る事に。坂梨を過ぎたあたりから阿蘇外輪山で最も標高が高い大観峰（釈迦の寝姿“涅槃像”に例えられる阿蘇五岳）を遠くに眺めながら雄大な自然と独特の景観を楽しめる阿蘇。まず、阿蘇大橋から米塚へ。（神話では、阿蘇開拓の神が収穫した米を積み上げて出来た山といわれる）お椀をひっくり返したような形が印象的。草千里ヶ浜へ足を伸ばし素晴らしい草原を眺められたのですが、台風並の強風が吹き写真を撮るため車から出ると体が風に持って行かれそうでした。阿蘇大橋へ戻りR325を進み『白川水源』へ。名水百選に選ばれた湧水で熊本を代表する水源地で、毎分60t 水温は年間を通し14℃と一定で透明度が高く飲みやすい軟水。沸き出している場所は手を入れると触れられそうなのに1.8mと深く透明度の高さが分かります。水源の側に蕎麦屋があったので早めの昼食をと入ったのですが、残念な味でガッカリでした。この後、R265のつづら折れの箱石峠を進み今回の目的でもある「長湯温泉」へ。濃度・温度・湧出量ともに全国有数の炭酸泉温泉は、久住山麓の丘陵地にある湯の里で湯治場として長い歴史がある。名物は芹川の流れの脇にある共同露天風呂の「ガニ湯」がありますが、水着を持参していない私たちはドイツ風建築のモダンな市営の立ち寄り入浴スポット「長湯温泉療養文化館 御前湯」でお湯を満喫することに。九州初「源泉かけ流し」宣言の長湯温泉組合のパンフレットによると

泉質 炭酸泉・炭酸水素塩泉

入浴効能 高血圧症・神経痛・慢性皮膚病・冷え性・慢性消化器病等

飲泉効能 糖尿病・肝臓病・痛風・慢性便秘・慢性消化器病

早速、入口で飲泉してみました。金属臭が強く沢山は飲めませんでした。露天は少し濁りがあり、ラムネ温泉ならではの全身泡に包まれる快感を期待していたのですが残念ながら体験できませんでした。月一で白杵からここを訪れるという方もいて長く付き合ってみないと感じない良さがあるのでしょうか。入浴後少しざらつき感がありました。汗をかいたので水分を取り売店で珍しい「豆腐アイス最中」をベンチに座り食べ熱を冷ましました。豆腐の割合が多くすっきりした甘さで美味しかったのですが、大きくて（300円）おなか一杯になりました。長湯温泉を後にして裏道から湯布院へ。

ホテルへ入る前に、お土産を購入する為湯布院の町へ寄り道。小雨交じりのお天気にも拘らずガイドブックや土産物袋を持った観光の人々が大勢町中を楽しんでいます。駐車場に車を置き今回の目的の場所、湯布院御三家の『由布院 玉の湯』のパブリックスペース「由布院市」へ。全国からセレクトされた雑貨・宿内で使われている食器類・オリジナルの食品類（ジャム・ドレッシング・佃煮・お菓子など）無添加にこだわった商品が多く、常温保管出来る商品を選んでレジへ。餅の作務衣を着たショップの方が一つ一つ手早く包んでくれ非木材紙で出来たペーパーバックもステキです。御土産用にと小袋も購入した商品の数だけの枚数頂いてしまいました。（エコに反してしまいました）おつりも新券で頂き、接客態度もきちんとしていて、ここでも違いを感じ取れました。買い物を済ませ今夜の宿へ。

昨年と同じホテルにチェックイン、部屋に案内され“あら、去年と同額で予約したはずなのに”と思うことがありました。まず、ツインのはずなのに広い・窓からの景色が道路側でボイラー音がかすかに聞えたのに、ホテルの庭が見渡せ由布岳が正面に見える・ウエルカムカードとオリジナルコースターのプレゼントが用意されていました。浴衣に着替え、私は二階、夫は一階の大浴場へ。窓から見える由布岳は霧に隠れたままで雨も大降りに。一時のんびりしてから夕食を取るため一階の個室食事処へ。去年は窓のない個室だったのですが庭が見渡せる広めの個室で、これもリピーター客へのサービスでしょうか。ちょっと残念だったのは食事が今一つだった事。去年のメニューの方が我家好みだった気がしました。部屋に帰り、明日の行動をガイドブ

ックを見ながら話し、天気なら「吉野ヶ里遺跡」「柳川」雨なら「九州国立博物館」へ行くことを決め早めに床に就きました。外の雨は本降りです。

5時前には目が覚め、窓のカーテンを開けると由布岳が姿を見せてはいたのですが頭は雲の中。雨は止んでいました。早速、一階の露天風呂へ。今回は一番乗りでした。鳥の声を聞き由布岳を眺めながらゆったりお湯を楽しみ、ふと横を見るとサウナが新設されています。私は苦手なので入りませんでした。要望があったのでしょうか。そう言えばJTBで予約をした際、男女の大浴場を夜と朝で交替しているのも昨年からで要望を実現したものだと言き私達はラッキーだった事を知りました。部屋へ戻り、帰り支度をし一階の朝食場所へ。昨年パンが甘めでしたが食事系の味に変わっていて美味しくいただきました。部屋へ戻ると霧が晴れてきて短時間でしたが由布岳の勇姿を見せてくれ思わずシャッターを切りました。記念にと私達も入ってパチリ。チェックアウトをし、小雨交じりの中「九州国立博物館」をめざし高速で太宰府方面へ。約1時間半、大分自動車道～九州自動車道を走り、筑紫野ICからのコースに沿って太宰府市の町中をくねくねと入り組んだ道を進むにつれ、さすが太宰府天満宮のお膝元 京都のような地名三条・五条などの名称があります。フェリーの時間もあるので(京都の北野天満宮へは行った事がある)「九州国立博物館」へ。駐車場から小高い山を公園の様に整備された百段ほどの階段を上がっていくと「何？」と目を疑ってしまうような、とてつもない物体が目飛び込んできました。何をイメージした物なのか、山の稜線なのか、一面スモークガラスで覆われ、それに対岸の山並みに移り込んで回りの山々と一体化されたような摩訶不思議な建物です。今、特別展『パリに咲いた古伊万里の華』が行われていて、『文化交流展(平常展)』も特別展のチケットで見ることができそうなので1300円(平常展だけなら420円)のチケットを購入。中に入るとアーチ状の高い天井に驚き、エスカレーターで『文化交流展示室「海の道、アジアの路」』まで一気に上がります。この展示がさすが国立の博物館、分かりやすく、見て回りやすく、見るもの全てがキラキラと輝いて見える。展示物のほとんど国宝か国宝級、それはそれは素晴らしい展示物ばかりでした。中学生や大学生が大勢来ていましたが、目を輝かせながら熱心に見入っていたのは大人だったように見えました。是非、

皆さんも訪れ体感してほしい所です。

3階『パリに咲いた古伊万里の華』の展示場へ。日本で作られ物が世界を席捲する、それが鎖国下の江戸時代にもありました。伊万里焼きの磁器がオランダ東インド会社によってヨーロッパにもたらされると、王侯貴族達はその美しさに魅了され、憧れの対象にまでなりました。日本とヨーロッパ、そして中国を含めて、海を越えた文化交流が生み出した輸出向けの伊万里磁器。ヨーロッパを魅了した華麗にして絢爛豪華な伊万里磁器の数々でした。

第1章 欧州輸出の始まりと活況（寛文様式、1660～70年代）33点

第2章 好評を博した日本磁器の優美（延宝様式、1670～90年代）41

第3章 宮殿を飾る絢爛豪華な対策（元禄様式、1690～1730年代）71点

第4章 欧州輸出の衰退（享保様式、1730～50年代）20点

パリの地で収集されたusui collection 約1000点の中から165点の名品をよりすぐって紹介されていました。とても繊細な作品から金で飾られきらびやかな作品まで、一度は見てみたかった逸品を一堂に観賞するチャンスに恵まれ、駆け足ではありましたが訪れる事ができ幸せな時間でした。『パリに咲いた 古伊万里の華』の開催は6月13日（日）迄。今後の特別展の情報として2011年1月1日～2月13日（日）ゴッホ展（オランダのファン・ゴッホ美術館とクレラー＝ミュラー美術館のコレクションから日本初公開作品を含め、油彩画約35点・素描約30点、ゴッホに絵画技法の基礎を手ほどきしたハグ派のモーヴや、パリ時代に出会いゴッホに影響を与えたモネ・ロートレック・スーラなどの油彩画約30点を展示）が開催されます。!!本展の間中は、太宰府周辺道路が非常に混雑すると予想されるので公共交通機関で!!確かにウィークデーにも関わらず博物館付近で渋滞していたので、休日などは大変な状況になるのかも知れません、ご注意迄。フェリーの時間までに臼杵市まで帰る時間を考え、最長2時間30分の滞在時間しか取れず平常展と特別展を駆け足状態での観賞でした。

小雨模様ではありましたが九州を後にする事が出来たのですが、八幡浜に到着しての大雨にびっくり、事故に気をつけながら松山ICに無事着けたのですが、インター出口で医療関係のワゴン車が横転したばかりの事故があり、運転手の無事を祈りながら、家路に就き私たちの旅を終えました。(A. M)

入野松原とウミガメ

6月16日、昨日の雨とは一転し朝から強い陽射しの中、夫と二人で浜へ散歩に出かけた。時折しずくの落ちてくる松原を通り抜け、収穫期のラッキョウ畑を過ぎるとまぶしいばかりに輝く白い砂浜が開ける。珊瑚と貝殻で出来たビーチには波が押し寄せ、セメントをぬったように引いていく。腰を下ろし、きめ細かくさらさらした砂の感触をしばし楽しむ。ひるがおのピンクが映える。眼前は遮るもの一つない太平洋の果てしない海原。雲一つない空と島一つない海を一本の線が区切る。水平線を境に澄みきった青色の違いに目をみはる。朝日を背にしたサーファーを乗せた白い波の打ち寄せる音。遠くで響く鷺の声。五感を全開しこの至福のひとつときを全身に受け入れた。

ここは高知県黒潮町。4kmに亘り数十万本のクロマツと砂浜を擁した高知県立自然公園の入野海岸。

老人と若者が近づいてきた。「その向こうで見つけて、とってきたばかりよ。やわいけんど、つまんでもかまんで」と老人は籠を足元へ置いた。砂まみれで産卵したばかりのウミガメの卵。色も大きさもピンポン玉そのもの。恐る恐るつまみ上げてみる『あっ！チョットへこんだ』『かまん。かまん』と。取材好きの私、話をしているうちに「この卵、孵化場へ持っていくけん一緒に行こうか」と。付いて行った。

波打ち際から離れたところに網で囲った小屋。直径20cm、肘が隠れるくらいの深さまで穴を掘り「卵を穴の中に入れてみんかえ」という。これまた恐る恐る2個ずつ穴に入れてやる。そして丁寧に砂をかけた。114個あった。よく見るとその小屋の中はたくさんの立て札が並んでいる。番号と月日と埋まっている卵の数が記されていた。今年初めてアカウミガメの卵を採取したのは5月14日、私が埋めたのは15頭目。一頭で100個余り産卵するそうでこの小屋にはざっと1600~1700匹のカメの卵が保護されている。産卵から孵化まで約2ヵ月かかるとか。老人は、ウミガメは産卵する時、穴にぼとぼと上から落とすのではなく、らせん状に産み付けると教えてくれた。

後で分かったが、その老人は地元の元小学校の校長先生でウミガメの保護をし、子ども達に体験・指導をしている人だった。

今回の帰省の目的は、松林の中にある賀茂八幡宮の官司をしていた義母の弟である叔父の一年祭に参列するため。その老人は叔父をよく知っていた。思い出話をしながら「彦おんちゃん」がカメに生まれ変わってこの浜に帰ってきたのではと思えてきた。

夫はこの海、この松原が少年時代の遊び場所だったという。その頃カメも遊び仲間。卵を失敬したり、カメの背に乗ったり、両足を揃えて乗れる位の大きなカメもいたとか。当時は海の幸は豊富で、伊勢海老もあわびも潜ればたくさん獲れ、中学生の頃には大人にまじって地曳網のアルバイトをし、自転車を買い、高校までの10kmの道のりを往復したそう。

もう一人、老人と一緒にいた若者は、元サーファーで出身は三重県、神戸に住んでいたが8年前にこの場所に魅せられて移住。奥さんは地元黒潮町の方、年齢は30歳半ば？でなかなかのイケメン。砂浜美術館の事務局の仕事をしている。砂浜美術館と言っても建物はなく入野の海岸そのものが自然・風景・人がアートになる美術館で館長さんは海に住み時々姿を現すニタリクジラ。1月「漂流物展」 4～10月「ホエールウォッチング」 5月「Tシャツアート展・シーサイドはだしマラソン」 8月「シーサイドギャラリー 夏」 11月「潮騒のキルト展」 「11月ラッキョウの花見」 「砂の彫刻」など多彩に楽しめる所。また、多くのサーファーがオートキャンプをしながら年中訪れる場所でもある。

この自然環境に魅せられて国内・外からの移住者がいるという。行政も積極的に推進し支援している。

さて、私が埋めた卵はお盆の頃には孵化する。無事に海に帰る姿を見届けたい。丁度夏休み、東京に住む一年生の孫にも見せてやりたい。

(s・k)

ウミガメが産卵中に涙を流す理由

ウミガメの産卵の時、苦しくて涙を流しているのではなく、体内の余分な塩分を排出しているのと目の乾燥を防いでいるためです。エサを食べるときに海水もいっしょに呑み込みますが、そのままだと体内に塩分が残るので、眼の塩腺(えんせん)から塩分を排出しているのです。それが、産卵が苦しくて泣いているように見える理由です。

砂の温度でオスとメスの性が決まる

卵は砂の熱で温められふ化しますが、砂の温度によってオスが生まれてくるかメスが生まれてくるか決まります。29度以上ならメスが多く生まれ、29度未満だとオスが多く生まれてくるそうです。ワニの仲間にも同じような現象が見られるそうです。

水路に水が勢いよく流れ、次々に田植えが進んでいます。植田には若い苗が整然と並び、水面は周りの景色を映して煌めきます。燕が低く旋回し、上空で不如帰が啼き交わしています。夜になると蛙の合唱が始まり、石垣では蛇の抜け殻を見つけました。生命が躍動する季節です。

福岡県糸島市のNPO法人「農と自然の研究所」（宇根豊代表、894人）が「地球環境基金」の助成を得て、昆虫学者の桐谷圭治氏を中心に「田んぼの生きもの全種リスト」の改訂版をまとめました（朝日新聞4/9）。水田には何と5668種もの動植物が暮らし、改めて、日本の水田が生物多様性の宝庫であることが浮き彫りになったと言います。全種リストは2000円。問い合わせは〒819-1631 福岡県糸島市二丈田地原 1168 農と自然の研究所。☎092-326-5595。

チョウが好む草花を学校で育てる活動の輪が、東京の都心から広がっています（朝日新聞6/13）。「蝶の道プロジェクト」として3年前に東京都品川区が事業化し、チョウの「食草園」は同区内で49ヶ所になり、そのうち11ヶ所は小中学校に作られ多くは環境学習の一環として位置づけられています。プロジェクトでは12種類のチョウと、それぞれの幼虫が好む主な草花を写真で紹介するパンフレットも配布しています。品川区は07年度から食草園づくりのための苗木代やパンフレットの作成費などとして毎年百数十万円の予算をつけています。同様の取り組みは世田谷区の小学校、大田区の児童センターのほか関西にも広がっていると言います。プロジェクトの仕掛け人グラフィックデザイナーの南孝彦さんは、皇居から丸の内ビル街を抜けて東京湾岸にある浜離宮庭園までチョウの道をつくる計画を関係者と温めているそうです。路地にプランターを置いたり、道路脇の植え込みを活用したりして、チョウが羽を休める花壇と食草園を作っています。南さんは「一つひとつの『点』は小さくても、感覚を縮めていけば線になり、道になる。ビルの谷間でチョウが舞うようにしたい。」

子供を巻き込んでの活動が素晴らしいと思います。

九年前、私たちの仲間のK.K.さんが、同じような思いを込めて、楠先生の監修のもとに「蝶の来る庭」 自然豊かな庭づくりと蝶のワークブック」と絵葉書を作りました。いまや私にとって手放せない一冊です。

宮崎県で猛威をふるっている口蹄疫。畜産家の方々の気持や、治療してもらえないまま“殺処分”される牛や豚のことを考えると胸が詰まります。“殺処分”という言葉に言いようのない違和感を覚えた宗教学者山折哲雄氏は6/8朝日新聞に“いのちと食と賢治と”という一文を寄せておられます。“こんどの事件に出会って私がもっとも衝撃を受けた証言は、被害のどん底につき落とされた農家の方のつぎのような嘆きの言葉だった。「命を絶って命をつなぐのが、おれの仕事。出荷して殺されるのは何とも思わないが、このように殺されるのは見るに堪えない」“人間は動物を殺して食べることを許されるが、動物が人間を襲って食べることは許さない、

という人間中心の倫理をわれわれの社会がつくった。この人類史的ともいうべき負い目の感覚が、殺処分という無機質の言葉の背後から立ちのぼり、われわれをふたたび苦しめはじめているのではないだろうか”と。

6/11 朝日新聞、天声人語によると4月21日に亡くなられた細胞免疫学の先駆者、多田富雄氏は読売新聞に連載していた「落葉隻語」に「過剰な無菌志向」を案じて「子供がたまに発熱したりするのは、黴菌との戦い方を習得しているからである。・・・成長の時期にここで戦い方を学習しないと、雑菌に対する抵抗力が弱くなり、逆にアレルギーを起こしやすい体質になる。免疫学者の私が言うのだ。信じていい」と書いておられるそうです。

口蹄疫がこの範疇にある病気かどうかは私には判断出来ないことですが、家畜全般が人間の嗜好にあう肉質向上を最優先にした、不自然な環境で飼育されていることは明らかです。人間に都合が良ければ何をしても良いという考え方はそろそろ変えなくてはいけない時が来ている様に思えます。ブランドという言葉を超した食材から卒業すべき時です。

昨年の暑い夏、政権交代し、何かが変わるかもしれないとの淡い期待を持ったものの、役者が変わっただけで与党・野党の台詞は決まっている政治劇を見せられているかのような失望感に苛立つ日々が続きました。そんな中、新しく菅内閣が誕生し、総理就任演説での“最少不幸社会をめざす”という言葉に、今一度期待してみたいという気持ちになっています。最少不幸社会を具現し、デンマークの福祉思想家、N・E・バンク・ミケルセンの提唱した“ノーマリゼーション”の理念が根付く社会へと成熟して欲しいと思います。“老い”“疾病”“怪我”“貧困”等々、様々な障害があってもそれは不便ではあっても不幸ではないと実感できる“共に生きる社会”へ育てて欲しいものです。

普天間基地移転に関しては日米合意という二国間の約束が厳として存在する以上、それを覆すことは、いかに困難を極めることであるかは容易に想像できます。しかし、60年安保から50年目に当たる今年だからこそ、“日本に基地は必要なのか”“武力で真の平和を担保できるのか”国民全員で考えるべき時なのだと思うのです。

世界各地、特にアフガニスタンで紛争後の国家における復興と平和構築のためのDDR（武装解除、動員解除、社会復帰）を指揮し、自らを“紛争屋”と称する伊勢崎賢治氏、医師でありペシャワール会現地代表として現地の人々と共に水路建設などの復興事業の先頭に立つ中村哲氏、非武装ボランティア「憲法九条部隊」を提唱する加藤朗氏の言葉に共通することは“憲法九条のおかげで日本の協力は人を傷つけないと信じてもらえるから受け入れられる。”ということです。特に中村哲氏は2008年11月の参議院、外交委員会で“陸上自衛隊の派遣は有害無益、百害あって一利なし。アメリカのPRT（地方復興チーム）あるいはNATOとは無関係に、日本独自にすすむならば、武装解除プロジェクト、外務省がおこなったプロジェクトに充分希望がもてる。”と言い切っています。伊勢崎賢治氏は“日本国憲法の前文は日本人にはもったいない。”と嘆息します。もっと現場の人たちの言葉に謙虚に向き合って欲しいと思います。

今、世界中が不幸に覆われているようにさえ思えます。紛争、貧困、疾病、災害、その中には先進国のリーダー達の“自分は正義だ”という思い込みと価値観の押し付けに依るものが少なくないように思えます。“貧しくてもよいかから外国人の支配を受けたくない人々がいる。欧米の失敗は価値観を押し付けた帰結だろう。”と加藤朗氏は語ります。

正義の為に、平和を守る為に、と思い込み、武装して自分達にとっての“非正義”と戦うのです。日々遠くの地から、死者の数が“数字”として報道されます。数が少ないとホッと胸を撫で下ろします。でも、たった一人でもその人にとっては一つしかない命なのです。当り前のことですが・・・。

カティンの森事件の様に 70 年も経たなければ明らかにならない真実もあります。ポーランド人捕虜 14500 人を銃殺すること、それをナチスの仕業だとすることが当時のソ連にとっての“正義”であると思ひ込んだのでしょうか。“戦争”は人間の人としての心を壊してしまいます。

人類の排出する CO₂ が地球温暖化の原因であるということは今や誰もが疑わないところです。しかし、その説の論拠となる気温データに捏造と改竄があったかもしれないという記事（週刊新潮 4/15）を目にしました。自説の正しさを守るため、認めさせるためでしょうか。その結果、関係者達は巨額の“温暖化マネー”を手にし、発電中に CO₂ を排出しないクリーンエネルギーだとして原発が必要不可欠のものだと認識されつつあります。必ずいつかは枯渇する化石燃料。今迄の生活レベルを保たなければならないという私達の思い込み。それらが環境に優しいという免罪符の下、代替エネルギーとしての原発を容認しているのでしょうか。原発には、老朽化した建造物、核廃棄物、何れの処分方法も確立されていないこと、ひとたび事故がおこれば大惨事が起きる危険があることには、目を瞑ってでも。

世界中の海底で天然ガスや石油の採掘が進んでいます。もしかしたら、リーダー達にとっては気温データの捏造・改竄も、原発の危うさも周知の事実なのかもしれないとさえ思いたくなくなってしまいます。本当に CO₂ 削減が必要と信じているのなら新たなガス田や油田を探そうとはしない筈だと思うのですが。

そして今、メキシコ湾でおきた原油流出事故は二カ月たっても、終息の気配さえ有りません。

海底 1522m という地上では考えられないような条件での作業であるにも拘らず、何故か 4/5 の事故の予兆とも思えるサインを放置し作業を継続、途中の重要なテストも既定の時間を大幅に短縮、チェックの省略、特殊な鋼管を使用すべきところを普通の物を使用、と悲劇的楽観としか言いようのない空気に支配され、事故の時へと向かって行ったようです。“多分大丈夫”“もう決めたんだ。やるしかない（4/15 のメール）”。そして、4/20 夜、その時が来てしまいました。石油掘削装置が爆発し、11 名の命が奪われ、折れた掘削パイプから大量の原油が流れ出しました。事故後、パイプをレンチで締めようとして失敗。油田そのものを泥で埋めようとし、これも失敗してしまいました。メキシコ湾の海面は不気味な玉虫色に輝くさび色の原油が帯状に広がっていると言います。環境に対する影響は測り知れません。

人間は人間以外の自然に対して余りにも傲慢になってきました。

自分達が自然の一員であることすら忘れてしまったようです。

忘れられない詩があります。あらゆる状況において、思い込みを押し付けない様、自戒させてくれる大好きな詩です。一部、抜粋して転載します。

『贈る歌』より「祝婚歌」 吉野弘 花神社

・・・

互いに非難することがあっても
非難できる資格が自分にあったかどうか
あとで
疑わしくなるほうがいい
正しいことを言うときは
少しひかえめにするほうがいい
正しいことを言うときは
相手を傷つけやすいものだと
気付いているほうがいい

・・・

『預言者』より「子供について」 カリール・ジブラン 神谷美恵子訳 日本評論社

・・・

あなたがたの子どもたちは
あなたがたのものではない
・・・
あなたがたは彼らに愛情を与えうるが
あなたがたの考えを与えることはできない
なぜなら彼らは自分自身の考えを持っているから

・・・

彼らに自分のようにならせようとしてはならない

・・・

あなたがたは弓のようなもの
その弓からあなたがたの子どもたちは
生きた矢のように射られて前へ放たれる
射る者は永遠の道の上に的をみさだめて
力いっぱいあなたがたの身をしなわせ
その矢が遠く遠く飛び行くように力を尽くす
射る者の手によって
身をしなわせられることを喜びなさい
射る者は行く矢を愛するのと同じように
じっとしている弓をも愛しているのだから

(K.O.)

ごみ出前講座より

6月19日土曜日午後1時半～3時まで、きらり東温主催のごみ出前講座に参加してきました。くらしの学習会活動会員で参加できたのは私一人でしたので、参加者の義務としてその内容をかいつまんでお知らせします。

市民環境課の課長および課長補佐から、まずはじめに、きらり東温がとったアンケートで出てきた意見についての回答がありました。

市の廃棄物検討委員会は、ごみ袋有料化の方向で道を探っていますが、市が独自で住民1000人対象にとったアンケートでは、ごみ袋有料化に反対だと答えた人は62%で、賛成だと答えた人は11%だったそうです。したがって、保険料、年金など軒並み値上げの現在、さらに家計を圧迫するごみ袋有料化を今すぐ実施するという事は難しい状況ですが、いずれは現実のものになる可能性が高いそうです。その場合、段階的に無料のごみ袋の配布枚数を減らすのか、時期はいつから始めるのかなどまだ検討中で結論は出ていないそうです。

プラごみの回数を増やしてほしいという要望には、現在前向きに検討中で、月4回の回収を考えているということでした。その代わりに、ペットボトル回収を月1に、瓶、缶を月1にと、回数を減らす方向で進めて行くものと抱き合わせでしていきたいということでした。

また、プラごみは、最終的には現在大分の新日鉄に送られ、ケミカルリサイクルと言って、重油等に代わる助燃剤として燃やされているということでした。それなら、あまり神経質にきれいにしなくてもいいのではないかという質問には、松山容器を経由し、その段階でごみ出し状態の検査があるので、きれいにし出してほしいということでした(最終的に燃やさないリサイクル業者に送られる場合もある)

不燃物の分別収集には平成23年度からはコンテナが導入され、ビニール袋が必要でなくなるという報告がありました。それぞれ設置されたコンテナに、瓶は瓶、缶は缶などを入れていくのだそうです。

落ち葉を焼き芋などと焼く小規模のたき火は、気をつけてする限りにおいては大丈夫だそうです。くれぐれも、それ以外のもの(プラごみなど有毒ガスを出すもの)を入れないようにということです。

容器包装リサイクル法に基づくごみは、処理費を、それを製造している会社がほとんど負担するので、できるだけリサイクルに回した方が市としては処理費が安くなってありがたいのだそうです。

ごみ袋のたたみ方で、名前が書きにくい場合があるという意見には、現在ごみ袋は入札で、中国で安く作る業者のものが使われており、不都合な点はその都度注文をつけて指導しているが、中には、底に穴があいているという苦情もあったということで、この場合は、全部交換させたそうです。

お年寄りから、粗大ごみの個別収集の話が出ましたが、松山のように葉書で事前申し込み、件数制限をつける事になると、今より不便になる面も考えられるので、十分検討が必要だとの事でした。短い時間でしたが、身近なごみ問題ということで、活発な意見、質問が出て、有意義な講座でした。(T・H)

お知らせ

・7月例会のお知らせ

7月14日(水) 午前11時ごろ 林宅出発

新居浜広瀬邸を目指します。昼食は新居浜のどこかでとります。参加ご希望の方は車の都合もありますので、7月7日までに林までご連絡ください。

・読者の声・投稿などお待ちしております。

くらしの学習会では、随時会員を募集しています。

活動会員 2000 円/年 購読会員 1000 円/年

振込先口座番号(郵便局) くらしの学習会 01610—5—21026

問い合わせ先 TEL/FAX 089—964—6956(林)

E-mail: ku-hayashi@nifty.com

編集後記

今回の会報は、70号です。1993年に第1号を発行して以来、くらしの学習会も18年目に入っています。細々とした活動ではありますが、地に足がついた着実な活動ができていのではないかと思います。本来なら、70号記念号とすべきところですが、今回は見送ります。また、節目を飾る何かを皆で考えて、次の記念号発行を飾りたいと思います。今後ともよろしくお願いします。 (T・H)

